

2019～2023 年度の活動報告

(平成 31・令和 1～令和 5 年度)

常任顧問 松本耕司 (16 期)

1. はじめに：

5 年ごとの会報の記念号には特集記事が掲載できればと思い、2008 (H20) 年の「50 周年記念会報」(P69～)には、過去の会報から双松会の成り立ちや、双松会に対する諸先輩の思いが投稿されているものを複製掲載した。往時の双松会の雰囲気を理解するためには是非ご一読をいただきたい。

以降、活動記録をひと目で見ることができるよう年表もつけて記録にとどめてきた。

2013 年 (H25) の「55 周年記念会報」では 2002 年から 2013 年までの 12 年間の活動記録(P120～)を、2018 年 (H30) の「60 周年記念会報」では 2014 年から 2018 年までの 5 年間の活動記録(P88～)を掲載した。

この時代は、旧松中・松高世代の方々から徐々に北高世代の方々活動の主になっていく、言わば「近畿双松会を次代につなぐための改革、そして定着の時代」であったと言える。

それから 5 年が経ち、先般発刊された 2023 年 (R5) の「65 周年記念会報」にも、新型コロナウイルスのために波乱の多かったこの 5 年間 (2019～2023 年) の活動記録を掲載したいと考えたが、残念ながらページ数の関係で会報からは割愛せざるをえなかった。

よって、記録保存のために、このホームページに「年表」とともに掲載をすることにした。ご一読をいただければ幸いである。

2. 2019(H31・R1)年度～2023(R5)年度の主な取り組み、出来事：

◆期間継続した取り組み

- ：「中堅・若手世代の参加拡大」
- ：情報提供・交流のための「会報」発行と「SNS」発信。

①2019(平 31・令 1)年度

- ・11 月 24 日(日)総会、101 名が参加。講演は若槻喜保氏 (11 期)、演題は「スポーツと郷土を愛した男 岸 清一」
- ・初参加者と 40 歳未満の参加者は、総会参加費の半額制を開始。
- ・松本耕司会長(16 期)が事務局長を兼務。
- ・「SNS」発信：2020 年 1 月 10 日：メールマガジンと LINE@の第一号を配信開始。

- ・2020 年 2 月初より「新型コロナ感染禍」が猛威を振るう。3 月の落語鑑賞会の開催を中止。

②2020(令 2)年度

- ・「新型コロナ感染禍」に翻弄され、総会・諸行事とも開催を模索したがすべて中止。

③2021(令 3)年度

- ・新型コロナウイルス感染禍により、2 年連続で総会開催を中止。
- ・2022 年 1 月 16 日に「宝塚歌劇鑑賞会」のみ開催、その他の行事はすべて中止。

- ・この間、将来に備えて「次期役員体制」、「緊急事態に対応できる会則改訂」を検討。
- ・新事務局長に宍道弘志氏 (31 期) 就任。ほか、新顧問 2 名、新副会長 3 名、新監事 1 名、新常任幹事 4 名就任。松本会長の事務局長兼務を解消。
- ・5 年に一度の「双松名簿」発刊から、近畿在住者名簿の総点検、更新。

④2022(令 4)年度

- ・6 月 18 日、2 年 4 ヶ月ぶりに役員会を開催し、11 月末の総会開催を申し合わせ。
- ・11 月 26 日(日)、3 年ぶりに総会を開催、73 名が参加。講演は、大阪大学消化器外科学教授土岐祐一郎氏 (高 30・理 9 期)、演題は「外科医として消化器癌と戦う」

- ・行事も、宝塚歌劇鑑賞会が劇場スタッフ感染により中止となった以外はすべて再開。
- ・歴史ウォーキングと里山ハイキングを「新」ハイキング」として一本化。

・会報を、編集業者を使わない手作りコンパクト版とし、印刷費を大幅改善。

⑤2023(令5)年度(設立65周年)

・12月10日(日)“設立65周年記念”総会を開催、103名が参加。記念講演は小泉凡小泉八雲記念館館長、演題は「小泉八雲、今を生きる」。

・設立65周年記念事業として、総会時に「謝恩大福引大会」を実施。

・9年ぶりの会長交代で、徳田完二氏(24期)が第十代会長に就任。新常任顧問1名、新顧問1名、新副会長1名、新幹事3名が就任。

・「中堅・若手の参加拡大」をめざす「次代につなぐオルグ活動」を事務局主導で推進。

・「65周年記念会報」を発刊。

3. 現状の課題と今後の取り組み：

①現状の課題

冒頭、この最近の時代を「近畿双松会を次代につなぐための改革、そして定着の時代」としたが、同時にこの期間は、そして今日までは総会参加者が減少しつつある期間でもあったことも否めない事実でもある。

(設立50周年から65周年の5年ごとの記念総会への参加者：159名⇒153名⇒125名⇒103名)

ふるさとの人口も北高の定員も減少していく中で、60歳、50歳代以下の方々の近畿における母数も年々減少していくことから、この年代の方々の参加の伸びが鈍いことは、当然の結果でもあると言える。

一方で、これまで近畿双松会を支えていただいた70歳以上の会員の方々の総会参加が徐々に減少していくのも自然の摂理であり、この両方の減少というジレンマの中にあると言える。

「改革は定着したけれど、目標の中堅・若手世代の参加拡大は不十分であった」という現状認識をした上で、次のステップに踏み出すことが肝心であると考えている。

②今後の取り組みにあたって

会員の減少は今後も長きにわたって進行するので、それを前提とした新しい取り組みが求められていることはまちがいない。

そのためには、**近畿双松会の運営の基本に関わる事項**・・・、即ち、総会のあり方、行事のあり方、SNSなどを活用した多様な会員管理のあり方、会計収支バランスの取り方、会報発行のあり方などについても、時代に合わせ、**人の変化に合わせて不断の見直しを続けていく必要がある。**

一方で、この会はふるさとと母校を同じくする者の・・・いずれにしても「人と人とのつながり」を基盤にする・・・しかも年代の異なる集団であることを考えれば、「**先輩を敬い、後輩を慈しみ、同期は励まし合う**」という**思いが会の運営の根底として大事であることに、どなたもご異論はないと思う。**

その中で、母数が減少していくという現在の状況に対応していくには、今まで以上に、「**一つの期、一人の人を大事にした**」丁寧な呼びかけ、対応を基礎に置いた・・・「**次代につなぐ活動**」などの個別活動を展開していく**必要がある**と考えるが、今後の具体的な活動については、賢明な後世の方々に託したいと思う。

4. 終わりに：

人口減少の問題は、今、すべての同窓会やふるさと会に大きな負の影響を与えている。

しかし、これまでも近畿双松会は先人の方々の努力で時代の変化に対応してきた。

今回のこの大きな問題にも、全会員のご理解をいただき、**知恵と思いを結集して対応し、近畿双松会が将来にわたり継続していけるようになることを、あらためて心から願う次第である。**

最後になったが、これまでご協力をいただいたすべての役員の皆様、会員の皆様に厚く御礼を申し上げ、この稿を終わらせていただく。